

「あんだ、この店にはよく来るのか？」
「あー大将の気に入りの店だからな、まあこ一緒
することは多いな」
「あんたの本丸はもしかして南の方なのか？」
「わざわざ訊くつてことはお前さんの本丸は北の
方かい？」
初めて出会った薬研と薬研であつたが話は弾ん
だ。

北は急に書くなつたり寒くなつたりで大変だと
か、南は夜寝苦しくなつてきたとか、大将が海
に行きたいと騒いでるとかうちの丸もそうだと
か、この丸に精を出すやつらはどうした
らいいんだろつたとか。
「同じ薬研藤四郎なら嫌がる気持ちもわかるが、
日傘は悪くねえぞ」
南の薬研はちらりと自身の黒い日傘を北の薬研
に見せてやつた。

「俺たちの黒い頭は日差しを吸うからな。日傘が
嫌ならせめて帽子被れ」
「日傘を使う薬研藤四郎とはなかなか珍しいな」

大将から下賜されたら使わんわけにはいかんた
ろつ、と南の薬研は笑い、だが恥ずかしくないわ
けじゃねえんだ、と言つてにんまり笑つた。
「一振りでも日傘を使う薬研藤四郎を増やしたく
てなあ」
「つはは、他当たつてくれ」
そうか、と南の薬研は、けれどわかりきつてい
たようにおとなしく引き下がり話を変えた。
「この店はレモンシロップも売つてるんだが、金
子に余額があるなら勧めとくぞ」
炎纏で儲ければこのレモンスカツシユができる、
と南の薬研は言つて、そこで立ち上がった。
「俺はまだ買い物があるから失礼するぜ。熱中症
には気を付けろよ」
北の薬研は軽く手をあげて応じ、南の薬研は会
計を済ませて店の外に出た。ぱつと黒い傘が咲く。
確かにあの日影があるのはいいのかもしれない、と
北の薬研は思つたがやはり少々恥ずかしく思つ。
「俺も買い物済ませるか」
会計レモンシロップもひと瓶、買い求めた
のだ。

おしまい

「甘すぎさつぱりして、なおかつ量が多い」
「コスパ良つてやつだな、と暑いのが苦手な薬研も、
楽しみだ、と返した。」

隣の薬研にお冷を持つてきた給仕に、その薬研
はすぐしレモンスカツシユを注文した。暑いのが
苦手な薬研もその給仕を呼び止めて同じくレモン
スカツシユを注文する。
「なんんだ、決まらんのか。俺はここのレモンスカ
ツシユが好きだぜ」
「よお。お前さん、暑いのは苦手か」
声に顔を上げればそこには別本丸の薬研藤四郎
がいて、失礼するぜ、と隣の席に座つた。来店し
たばかりだというのに涼しい顔をして、本丸
によつて個体差があるのだと知れる。

「よお。お前さん、暑いのは苦手か」
声に顔を上げればそこには別本丸の薬研藤四郎
がいて、失礼するぜ、と隣の席に座つた。来店し
たばかりだというのに涼しい顔をして、本丸
によつて個体差があるのだと知れる。

出されたお冷で涼みながら薬研は卓のメニュー
を見る。高い。そしてどれも洒落ている。乱あた
りにバシたらからかわれるだろうな、などと考え
ていた。
「よお。お前さん、暑いのは苦手か」
声に顔を上げればそこには別本丸の薬研藤四郎
がいて、失礼するぜ、と隣の席に座つた。来店し
たばかりだというのに涼しい顔をして、本丸
によつて個体差があるのだと知れる。

「暑い……」
万屋街へ薬草の調達に来ていた薬研藤四郎は、
フロアに沈み込むなりそつづがやいた。
その喫茶店は万屋街の一番栄えたところにあつ
て、普段から混みあつていり少々お高い。普段
なら薬研が立ち寄るような店ではないのだが、背
内に腹は代えられない。薬研は暑いのが苦手だつた。
店内はいい塩梅で冷房が効いている。

北の薬研と南の薬研

刀剣乱舞二次創作小説

こんにちは、ごおりです。
暑いぞすね！ 梅雨入りしたのにもう
明けたんなんです？
以前、冬場に北の明石さんと南の明石
さんのお話を書いたのですが、今度は北の
薬研さんと南の薬研さんのお話を書い
てみました。
QRコードは匿名感想アンケートフ
ォームですので、よかつたら感想をくだ
さいませ！
ではでは、熱中症に気を付けまし
う。水分補給は怠らず！



発行
2022.06.26
佐藤ごおり
@ice13g